

解 答

- [一] 問一 a 3 b 4 問二 三郎と四郎の身に何か起きたのではないかという母親の不安
 問三 2 問四 4 問五 母親の不安を一気に高めてしまう夜の暗やみ 問六 3
 問七 1 × 2 × 3 × 4 ○ 5 × 6 ○
 問八 2 問九 4 問十 子どもだけで遠出した点・家族に内緒で出かけた点
 問十一 3 問十二 1 問十三 2
 問十四 二人に対する母の態度はすっかりひねくれていた私の心を素直にさせた。厳しいしっ責の想像におびえていた三郎は、弟の泣き声にさそわれておえつをもらし始めた。無情にもあまえをきょ絶された四郎も、行き場をなくした悲しみをもて余して号泣し続けている。「先にご飯にしたらどうですか。話はそれからでもおそくないでしょう」私の口について出た言葉は私自身をいっそうおだやかにした。
- [二] 問一 何を言いたいのかがはっきりと伝わってこないところ 問二 [始め] これら [終わり] の結果
 問三 あいまいな表現を使って主張をぼかすことで、相手が受け入れやすいようにする戦略。
 問四 あいまい言葉そのものを受け入れない大人には、使う者の意図は理解されない。
 問五 若者たちに見られるあいまい言葉の多用は自己を主張する技術の未熟さを示すものではなく、反発を受けて主張を受け入れてもらうためのコミュニケーション戦略なのだろう。
- [三] 1 オ 2 キ 3 エ 4 イ
 [四] 1 一笑 2 細心 3 勇〔み足〕 4 製品
 5 大局 6 と〔る〕 7 かえり〔みる〕 8 もんよう

解 説

[一] 出典は、梶井基次郎「夕凪橋の狸」。
 問二 「二人の弟が昼飯時から姿を消したまま、夕方になっても帰って」来ません。「どこにいても必ず帰って来るべき、おやつの時になんでも帰って来ない」ため、母親の心配はいよいよ募ります。小さな子どもたちの身に何かあったのではないかという「例の不安」が今や「争えない色や線になって、彼女（母親）の顔に描き出され」ています。
 問三～五 「母は早くから不安にさいなまれていたにちがいない」のに「早くからその不安をうたえたこと」ができなかった理由の一つに「私（次郎）がまちがいなく反発すること」が挙げられています。不安がピークに達すると、それまで遠慮していた母親もきっと我慢できなくなり、きっと次郎に「捜しに行ってくれと言いに来る」。けれども、こういうことは以前から何度もあったのでしょうか、次郎は母親の言いつけに素直に従わず、「反発」してしまう。事実、母親が「どっか心当たりがありませんか」と尋ねても、「心配しなくともすぐ帰って来ますよ」と、まともに取り合おうとしません。弟たちを捜しに行くのを億劫がっている次郎は何も自分の口から母親の不安をあおるようなことを言う必要はないだろうと口をつぐんでいることにしました（問三→2）。明らかに不安に色が濃くなっている母親と、それに気づいていながら知らぬふりを続ける次郎。互いの胸の内は分かっていながら、牽制し合うかのようにそのことについて触れようとしない親子の間には冷たく、寂しい沈黙が漂っています（問四→4）。そして、刻々と時間は過ぎ、ついに「ぱっと部屋の電灯にも電気が」ついたところで、母親の不安は限界に達してしまいます。「時計の針の動きにしろ、日光がうすれてゆく加減にしろ」、「それにともなう母の不安もなめらかな増加を見るに過ぎない」のですが、「電灯」は、「町中を暗やみに封じこめ」、「母の不安ももう立ってもいられない程度に激変」させてしまう「夜が来たことの争えない証拠」なのです（問五）。

問六 一度子どもたちの安否を気づかうことばを口にすると、母親の不安はどんどんエスカレートしていくようです。そんな母親に対していら立ちを募らせ、ついには「とうとう捜して来いと言うのだな！」と腹を立てた次郎は、父が電話で「次郎に捜させろ」と指示したという母親のことばを疑います。自分の言うことに耳を貸さない母親に対する不信感が募り、とにかく捜しに行かせたい一心で母親が嘘をついているのではないかと勘ぐってしまうほど、次郎は母親の言動に態度を硬化させています（3）。

問七 「腹もすいている」とごねているうちに「帰って来るかもしれない」と考えた次郎でしたが、母親は次郎がいつも捜しに行けるよう、既に一人分の食事を用意していました。とにかくどんなことをしても捜しに行かせたい母親の態度に次郎の不満は高まる一方です（4→○）。「飯に難くせをつけて」すねることで時間を稼ぐ作戦は消えましたが、次郎は「こんな時には意地にでも空腹をかかえて飛びだすというあてつけ」をして母親に罪悪感を抱かせることができれば、少しは腹立ちも収まるだろうと考えています（6→○）。

問八 「空腹をおさえながら」しぶしぶ捜して戻って来た次郎に向かって、父親は「あそこを捜しておいで」ともう一度

捜しに行かせようとなります。次郎は「飯も食わずに〇〇神社まで行ったんだぞ」と憤りますが、それは母親が食べさせなかつたのではなく、用意してもらった食事を自分の意志で食べなかつただけのことです。母親に続いて父親までもが自分の気持ちを無視して一方的に命令することに強く反発した次郎は、自分が不当に食事を与えられないかのように憤慨し、父親の態度を「言語道断」だと切り捨てます〈→2〉。

問九 ごね続ける次郎に向かって、母親は「強情はって行かないのならお父さんに言いつけるよ」と脅します。子どもたちにとって父親は絶対的な存在です。本当ならば口答えするようなことはないはずですが、よほど腹に据えかねていたのでしょう、父親に対して、次郎はあえて「飯を食おうと言ひはろう」とします。そうすることで恐らくは「もどかしがって、飯は後にしてと言う」と思われる父親に「口答えをしてやろう」という「意地悪い論理を働くわけではなかった」。けれども、不平を抱いていた次郎の心が「その辺を大きくねらっていた」のは間違いないようです。三郎や四郎も腹をすかせているのだから早く捜しに行けと命じる父親に向かって、次郎は臆することなく「それは（弟たちの）勝手です」ときっぱり言い返しました〈→4〉。

問十 ようやく弟たちが帰ってきました。「どこへ行ってた」と厳しく問う父親に、三郎は「築港へ軍艦を見に行ったのだ」と神妙に答えます。「このあいださかんに母に行かせてくれるよう三郎がねだっていた」のを母親が「承知しなかった」くらいですから、小さな子どもたちだけで行くには遠いところだったようです。しかも家族に断りなく出かけてしまったために、ここまで騒ぎになってしまったのでしょう。

問十一 厳しく叱られることを覚悟していたらしく、三郎は父親の前で「おびえた表情をして」立ちすくんだまま何もしゃべりません。とにもかくにも無事で帰って来た弟たちが「しょげて、まじめであった」のを見て、それまで抱いていた「父や母に対するこじれた気持」が「うすれて」いた次郎は、既にじゅうぶん後悔し、反省している様子の三郎が父親から体罰を受けるのはかわいそうだと思い始めます〈→3〉。

問十二・十三 「すでに入る時泣いていた四郎は、だんだん泣き声を大きくしてわめきだし」ます。「長い心配から」「解放された安堵と喜びから、四郎は「家へ帰りつくまでになめつくした、恐怖や、空腹や、たよりなさや苦痛のいたでが早いいえるかのように」ひたすら泣き続けます〈問十二→1〉。けれども、深く後悔している三郎に比べると、次郎には「しかし四郎あまえてやがるな」と思えて仕方ありません。家族の慰めを求める泣き声でしたが、母親は「彼をただ泣かしておくだけではともかまって」やりません。母親が四郎に対して優しさを見せないのは、四郎にも三郎と同じように自分のしたことを反省させなければならないという思いによるものでしょう〈問十三→2〉。

問十四 ここまであらすじと矛盾しないような流れを考えます。父母に対して強く反発していた次郎でしたが、無事に帰ってきてしょげている弟たちを見てわだかまりは消えます。弟たちに対する思いはそれぞれ異なります。ひどく後悔し、父親の厳しい叱責を恐れている三郎には同情し、家族に心配をかけたことを反省するどころか、逆に慰めを求める四郎には「あまえてやがるな」と厳しい視線を向けています。そんな四郎を母親があまやかさないことも好感を持って受けとめています。厳しい口調で「どこへ行ってた」と問いただした父親は、築港まで往復してきた無鉄砲さに「少しあきて」いるようですので、次郎が心配したような体罰を加える展開にはなりにくい。場面の雰囲気や、登場人物それぞれの状況、心情を踏まえた上で、後に続く物語を「創造」した場合、恐らく「一件落着」の方向で話が進んでいくと考えられます。

[二] 出典は、橋本五郎監修、読売新聞新日本語企画班「新日本語の現場」。

問一・二 「札幌市の五十代の女性」は若者たちが「あいまい言葉のオンパレードとも言える」会話を続いているについて、自己主張が苦手なために、「何を言いたいのか、相手にきちんと伝わっていないのでは」ないかと心配しています〈→問一〉。ところが、「約二百人の学生を対象に心理や行動を分析したところ、これらの（あいまい）言葉をひんぱんに使う人の方が、相手に自分の主張を伝える能力が高いとの結果」が出ました〈→問二〉。

問三・四 若者たちがはっきりとした物言いを避けるのは、「あまり直接的な言い方をすると、反発を受けやすく、相手の心にすっと入っていけない」と考えるからです。彼らが好んであいまいな言い方をするのは「言いたいことは、あいまい言葉というオブラートでくるみ」、自分の主張をわざとぼかすことで「相手が受け入れやすいように」工夫し、コミュニケーションを円滑に進めようとする一つの「戦略」に外なりません〈→問三〉。けれども、これはあくまでも若者同士の間で通用する作戦です。若者たちの気づかいは「あいまい言葉そのものに拒否反応を示す大人」たちには理解されません〈→問四〉。

問五 世代間に横たわる言語感覚のギャップについてまとめます。「あいまい言葉をたくさん使う若者」を大人たちは「自己主張が苦手」で「何を言いたいのか、相手にきちんと伝わっていないのでは」ないかと考えています。けれども、これは若者の自己主張の能力が低いのではなく、彼らが傷つかないよう互いに気をつかいあいながらコミュニケーションをとりあおうとする立派な戦略なのだということが明らかにされています。